

伝え合う力を高めるための学習指導の工夫

— 話し手と聞き手が相手意識をもったブックトークを通して —

吳市立阿賀小学校 小原 由利

研究の要約

本研究は、伝え合う力を高めるための学習指導の工夫について考察したものである。伝え合う力を高めるために、話し手と聞き手に相手意識をもたせたブックトークを行った。相手意識とは、ブックトークで聞き手となる他学級に対する相手意識と、よりよいブックトークにするために同学級内で助言し合う活動においてもたせる相手意識である。ブックトークは第4学年で実施し、中学年における「A話すこと・聞くこと」に位置付けた。伝え合う力を高めるために、シナリオ作成時で書く手立てを示したり、助言し合う活動の中で聞き手にアドバイスカードを用いて助言し合わせたりする等の工夫を行った。その結果、指導者によるシナリオや動画などの資料の評価、児童が書き込んだ付箋や感想、自己評価の分析から、伝え合う力が高まったことが明らかになった。これらのことから話し手と聞き手が相手意識をもったブックトークは、伝え合う力を高めるのに有効であることが分かった。

I 主題設定の理由

言語能力に関する課題について、教育課程企画特別部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」（平成28年）の中で、言葉によるコミュニケーションの問題が挙げられ、児童たちの人間関係の問題について、インターネット上で一方的に情報等を大量に発信するという現代社会においては、他者の存在を意識しながら発信する力や他者に共感する力も身に付けさせる必要があると述べられている⁽¹⁾。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編には、「伝え合う力を高めるとは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである。」⁽¹⁾とあり、相手を意識しながら正確に話したり聞いたりすることが重視されている。

また、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（平成28年）によると、現行学習指導要領の課題を踏まえた学習・指導の改善充実や教育環境の充実において、児童同士が互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることと述べられている⁽²⁾。

平成30年度「基礎・基本」定着状況調査を基に作成した本学級児童を対象とする事前アンケートによると、授業で自分の考えを積極的に伝えている割合が78.2%と肯定的な回答をした児童が多かった。しかし、挙手をする児童の固定化や相手を見ながら発表をするという相手を意識した姿が見受けられなかった。また、「話し手の発表をメモを取りながら聞いています」では肯定的回答をした児童は59.4%，「よく分からなかつたりもっと知りたかったりした時には、話し手に質問をしています」の肯定的回答も43.7%であり、伝え合う場面で、話し手のことをもっと知りたいという意識が低いことが分かった。

さらに、平成30年度「全国学力・学習状況調査」において、家庭での1日当たりの読書時間が1時間より少ないと答えた児童は、全国では80.7%，県平均では79.6%，本校では79.4%であり、本を読んでいない児童が多く、答申に述べられている言語活動を学習場面に位置付ける必要性もあると考えた。

そこで本研究では、本を通して児童同士が相手意識を常にもちながら、互いの知見や考えを伝え合う言語活動を行うことで伝え合う力を高めることができると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 伝え合う力について

(1) 伝え合う力とは

本堂寛（2000）は、「『伝え合う』の『合う』を重視することによって、一方通行的な『伝達』とは異なって、相手の立場や気持ちを大切にし合う双方的な『伝え合い』の意味を大切にしていかなければならぬ。」²⁾と述べ、「互いの立場や考えを尊重しながら言語で伝え合う能力の育成を重視して『伝え合う力を高める』こと」³⁾を位置付けている。

このことから、伝え合う力とは、話し手と聞き手が相手意識をもち、相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の考えや気持ちを言葉で伝える力であると考える。

（2）伝え合う力と「A話すこと・聞くこと」領域との関連について

本研究における話し手として育成をめざす能力を「話す力」、聞き手として育成をめざす能力を「聞く力」と位置付け、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編「A話すこと・聞くこと」領域に示されている内容を参考にし、中学年における伝え合う力を高める指導事項を表1に示す。

表1 中学年における伝え合う力を高める指導事項

立場	能力	学習過程	指導事項
話し手	話す力	話題の設定・情報の収集・内容の検討	(1)ア 目的を意識して、日常生活から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な情報を選ぶこと。
		構成の検討・考えの形成	(1)イ 理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。
		表現・共有	(1)ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。
聞き手	聞く力	構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有	(1)エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。

表1に示した伝え合う力を高める指導事項を基に本研究における伝え合う力を表2に7点定義する。

表2 本研究における伝え合う力

① 必要な情報を選ぶ力
② 理由や事例などを挙げる力
③ 話の中心が明確になるよう話の構成を考える力
④ 話し方を工夫する力
⑤ 必要なことを記録したり質問したりして聞く力
⑥ 話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力
⑦ 聞いたことを基に自分の考えをもつ力

本研究では、話し手と聞き手が相手意識を明確にもちながら伝え合う力を高める活動を行う。特に相手意識をもちながら活動する場面において育成する力②③④⑤⑥に焦点を当て、研究を進めていく。

（3）伝え合う力と相手意識との関連について

小森茂（1999）は、「伝え合う力」を高めるために、次のような五つの「言語意識」を子供たち（＝学習者）の側から具体的に取り上げ、「本時の学習指導案」に位置付けることを提案している。小森の提案する五つの言語意識を表3に示す^{③)}。

表3 五つの言語意識

a	自分にとっての相手意識
b	（aを受けた）目的意識
c	（a, bを受けた）場面や状況意識、条件意識
d	（a, b, cを受けた）相手や目的、場面や状況、条件などを考えたり、判断したりしながら、意図的・計画的に話したり、相手の話の意図や要点を的確に聽き取ったりするための方法や技能意識
e	（a, b, c, dを受けた）相手や目的、場面や状況、条件などを踏まえ自分の言葉で意図的・計画的に表現したり理解したりする言語行為になっているか等を自己評価（相互評価も含む）する評価意識

表3から、伝え合う力を高めるためには、五つの言語意識を学習指導案に位置付けることが重要であると言える。また、言語意識のb～eは、aの「自分にとっての相手意識」が、全ての意識の根底になっていることも分かる。そこで本研究では児童に、五つの言語意識の中でも特に相手意識をもった姿をイメージさせながら学習を行うことで、伝え合う力の向上を図っていく。なお、本研究における相手意識は、単元を通して常にもたせる相手意識（ブックトークで聞き手となる他学級に対する相手意識）と、よりよいブックトークにするために同学級内で助言し合う活動において、話し手と聞き手にもたせる相手意識の二種類を設定する。

これらのことから、「A話すこと・聞くこと」領域で、児童に相手意識を常にもたせ、相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の考えや気持ちを言葉で伝える活動を繰り返し行うことで本研究における伝え合う力を高めていくこととする。

2 ブックトークについて

（1）ブックトークの定義

ブックトークについては、目的、対象、テーマ、選本、シナリオ、見せ方などについての定義付けを松岡享子（1990）、青木淳子（2014）がしている。それらの定義を表4に示す。

表4 松岡⁽⁴⁾、青木⁽⁵⁾の考えるブックトーク

観点	松岡	青木
目的	○本に対する興味を起こさせること	○聞き手が本を読みたい気持ちになること
対象	○制限なし	○原則小学校中学校年以上
テーマ	○自由 ○教科と関連したテーマ	○聞き手が興味をもちそうなものなら自由
選本	○子供対象なら5、6冊 ○自分の好きな本を1、2冊入れる ○本の分野を幅広く ○レベルに幅をもたせる	○7、8冊 ○長い間支持されてきた作品 ○好きな本 ○本の分野を幅広く ○レベルに幅をもたせる
シナリオ	○最初と最後に一番薦めたい本をもつてくる	○導入の工夫 ○本に軽重
見せ方	○読みきかせ ○朗読 ○あらすじ ○挿絵や図 ○本と本のつなぎ	○挿絵や写真 ○引用 ○あらすじ ○本と本のつなぎ ○読みきかせ、ストーリーテリング、指人形、実物、クイズ、実験、音楽、詩の吟誦 ○声、視線、笑顔

表4から、ブックトークは、聞き手に本を読みたいと思わせるための活動であり、聞き手の興味を喚起するために、話し手が「聞き手が興味をもちそうな本」を数冊選び紹介する活動であると言える。また、聞き手に本を読みたい気持ちになってもらえる

ようにシナリオを作成し、そのシナリオの中にいくつかの見せ方の工夫を取り入れていく必要があることが分かる。

(2) ブックトークと小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編との比較

東京都小学校図書館研究会ブックトーク研究委員会（2007）は、ブックトークの活動の流れを7点に分けて述べている⁽⁶⁾。

ブックトーク研究委員会の提案するブックトークの活動の流れに沿った学習活動と、中学年における伝え合う力を高めるための重点的な指導事項を表5に示す。

表5 ブックトークの活動の流れと重点的な指導事項との関連

活動の流れ	重点的な指導事項
(1) テーマの選定	(1) ア 日常生活から話題を決める
(2) テーマに合った本を探す	(1) ア 情報を収集する
(3) 本の選定	(1) ア 比較したり分類したりする
(4) 読入とまとめを考える	(1) イ 理由や事例などを挙げる
(5) 細案を作る	(1) イ 話の中心が明確になるよう話の構成を考える (1) ウ 書類の抑揚や強弱、間の取り方などの工夫をする
(6) 練習をする	エ 記録したり質問したりしながら聞く
(7) 本番	(1) エ 話し手が伝えたいことの中心を捉える 自分の考えをもつ

表5から小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編に示されている「A話すこと・聞くこと」における重点的な指導事項は、ブックトークの活動の流れに当てはめることができる。つまり、ブックトークそのものが伝え合う力を高める活動であることが分かる。

(3) ブックトークと二つの相手意識との関連

小森の示す五つの言語意識とブックトークの関連を表6に示す。

表6 言語意識とブックトークとの関連

言語意識	ブックトークにおける学習活動
相手意識	（練習）同学級（本番）他学級
目的意識	自分たちがお読みする本を聞き手に読みたくなつてもらえるように紹介する。
場面・状況意識	図書室（教室）でテーマごとに紹介する。 聞き手：（1組）学級全員（3組）少人数
技能意識	ブックトークで紹介する。 おもしろさが伝わるように紹介方法を工夫する。
評価意識	同学級でブックトークのやり方を助言し合う。 他学級で、おもしろさが伝わったか、助言をもらつ。（相互評価） 助言し合う活用の中で見直したり、本単元で伝え方がついたか振り返る。（自己評価）

表6から、ブックトークは、小森の示す言語意識を全て網羅していることが分かり、伝え合う力を高めるための活動として効果的であることが分かる。また、相手意識に焦点を当てて考えてみると、単元を通して常にもたらせる相手意識を他学級に設定すると、他者の存在を意識しながら発信する力につながり、相手意識を同学級に設定すると、他者に共感する力につながると考えられる。つまり、児童に二つの相手意識をもたらせ、ブックトークを行うことは、

伝え合う力を一層高める手立てとなると言える。

(4) 本研究におけるブックトークの定義

ブックトークは、話し手が聞き手に自分の薦める本を紹介することで、聞き手の読書意欲を喚起する活動である。話し手は、自分の薦める本のおもしろさを聞き手に伝えたいという表現意欲を高め、どのように話の内容を準備し構成したら相手によく伝わるのかを考え、より伝わる方法を習得したいという思いを抱く。それは、本を選定し、選定した本から必要な事柄を選んだり、話の中心が明確になるように話の構成を考えたり、話の中心や話す場を意識して話し方を工夫したりする活動へつながる。また、聞き手は、話し手が薦める本のおもしろさは何か聞こうとしていることで、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えることができる。ブックトークは、児童の好きな本をだれかに伝えるという行為であり、児童は内面から「伝えたい」という思いを抱く。それは、読書をする態度や意欲に結び付く。そこで、表4で示された松岡と青木の挙げる定義の共通点を踏まえ、本研究におけるブックトークの定義を表7に示す。

表7 本研究におけるブックトークの定義

目的	聞き手の読書意欲を呼び起こすこと
対象	対象に制限なし
テーマ	自由
選本	子供対象なら、5～6冊 本の分野やレベルに幅をもたせる 話し手の好きな本を入れる
シナリオ	冒頭と結末の工夫、本に軽重をつけること
見せ方	声の大きさ、速度、抑揚、視線などの話し手の技術面の工夫 読みきかせ、挿絵や図、クイズ、あらすじなどの工夫
技	ブックリストの提示 読書コーナーなどの準備
その他	

ただし、本学級児童は初めてブックトークを行うことから、選んだテーマで3～4人のグループを作る。また、一人一冊の本を紹介させ、グループでブックトークを行わせる。本に軽重を付けることは難しいと考えるので順番は問わないこととする。また、同じテーマを選んだ児童同士で、お互いに選んだ本を読み合っておくこととする。

3 伝え合う力を高める学習指導の工夫

(1) シナリオ作成（構成の検討・考えの形成）

シナリオ作成は、表2に示す本研究における伝え合う力②理由や事例などを挙げる力③話の中心が明確になるよう話の構成を考える力を高めるための活動である。

青木（2014）は、本について語るにはその本に見合っただけの言葉や表現が求められるので、じっくり

りと考えたシナリオ作成の重要性を述べている⁽⁷⁾。

難波博孝（2006）は、リアルな場が設定され、どうしても伝えたい相手や目的がある時、児童は真剣に悩み、書くことの具体的な技能を欲しがると述べており、シナリオ作成の際にも相手意識・目的意識を常にもたせることが重要だと考えられる⁽⁸⁾。

そこで本研究では、まず、選んだ本を紹介するシナリオを個人で作成させる。書く手立てとして見本を提示し、シナリオのイメージをもたせる。作成時の視点として、どこがおもしろいから薦めたのか理由を考えさせたり、聞き手によりおもしろさが伝わる構成や見せ方の工夫を考えさせたりする。また、見せ方を技としてワークシートの下段に示し、児童が意識してシナリオを書けるようにしておく。

さらに、相手意識をはっきりもたせるために、どんな人へお薦めの本を紹介したいのか具体的に伝えたい人を書かせる。児童に示した技を表8に示す。

表8 児童に示した見せ方の技

	技の内容		技の内容
④	【作者しようかい】 ○名前 ○どんな人? ○他に書いている作品	⑤	【引用】 ○テーマが書かれているところ ○お話が変わったところ ○クライマックス(お話の一番いいところ) ○登場人物の気持ちが書いてあるところ
⑥	【登場人物】 ○主人公 ○他の登場人物 ○どんなことをした?	⑦	【挿絵や図】 ○お気に入りの場面の絵や図
⑧	【あらすじ】	⑨	【実物】 ○お前に関係のあるものを見せる。
⑩	【エピソード】 ○短く、分かりやすく ○長い、複雑で、なにを、 ○どうして、どうなった。 ○できることなど	⑪	【クイズ】 ○お気に入りの場面や友達に興味をもってもらいたい場面をクイズに出す。 (三択クイズやオククイズ)
⑫	【読みきかせ】	⑬	【音楽】 ○歌
⑭	【朗読】	⑮	○お話を出てくる音楽を歌って見せる。
⑯	【暗唱】(あんしょう)	⑰	○お話を出てくるグループをいつしょにする。

(2) 助言し合う活動（表現、構造と内容の把握、精査・解釈、考え方の形成、共有）

助言し合う活動は、本研究における伝え合う力③話の中心が明確になるよう話の構成を考える力④話し方を工夫する力⑤必要なことを記録したり質問したりして聞く力を高めるための活動である。

これまで稿者は、シナリオなどを書く指導では、児童が書いたものを教師が添削したり助言をしたりしていた。児童同士の交流でも、誤字脱字や主述関係について交流させることが多かった。また、交流の過程で、小森が示す表3の五つの言語意識をもたらせた上で文章内容について伝え合うことは疎かになっていた。

木下美和子(2005)は、相手意識の中には、相手を分析的に捉える力を育成しないといけないことが隠されており、分析的に捉えることで、適切な表現技法や技術などを選択する必要が生まれてくると述べ、それは、伝えたい相手と積極的に関わろうとする態度育成を可能にすることも含んでいるとも述べている⁽⁹⁾。

木下の述べる相手を分析的に捉える力や、適切な表現技法や技術を本研究におけるブックトークに置き換えてみると、相手を分析的に捉える力とは、聞き手が知りたいことは何かを考えながら話したり、話し手の伝えたいおもしろさが何かを考えながら聞いたりすることであり、適切な表現技法や技術とは、見せ方（表現・技）と捉えることができる。

そこで、児童が助言し合う時間をアドバイスタイムと呼び、お互いの思いを受け止め合いながら助言し合うように伝える。また、聞き手側の手立てとして「グッドアドバイスカード」（図1）を提示し、それを見ながら活動させるようにしておく。

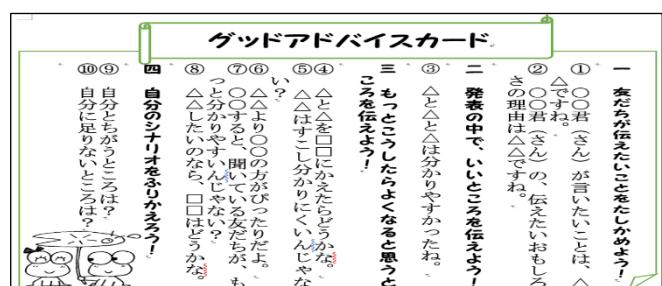


図1 助言する時の聞き手側の手立てカード

まず、シナリオ作成時の助言では、技、おもしろさの理由や構成、出だしの工夫、つなぎ言葉や文末表現などに着目させながら、聞き手に薦めたい本のおもしろさがより伝わるシナリオの内容になるよう助言し合わせる。また、グループ毎に、初め・終わりの言葉を付け加えさせる。

次に、完成したシナリオを使って本番を想定した練習をさせる。この時は、表現である話し方の工夫（声の大きさ・強弱・抑揚・間など）について助言し合わせる。なお、アドバイスタイルは、同じグループ同士、他のグループ同士と形態を変える。その時、付箋に良さや改善点を書いて交流させる。また、話し手と聞き手を交代させながら助言し合うことで両方の立場からの相手意識をもたせることができる。それは、相手の考えを尊重しながら、双方向的に自分の考え方や気持ちを言葉で伝える機会となり、伝え合う力を高めることとなる。

(3) ブックトーク（表現、構造と内容の把握、精査・解釈、考え方の形成、共有）

ブックトークは、本研究における伝え合う力④話し方を工夫する力⑤必要なことを記録したり質問したりして聞く力⑥話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力を高めるための活動である。

まず、同学級の他のテーマを選んだ友だちに発表させる。この時、聞き手は話し手の伝えたいことの中心は何か考えながら聞き、良さや改善点を付箋に書く。

次に、他学級へブックトークを行わせる。他学級へのブックトークは2回実施する。1回目は、学級を6グループに分け、ブース毎に発表させる。2回目は、2グループ毎に学級全体に発表させる。聞き手の人数を段階的に増やすことで、話すことに抵抗感を無くしていく。これらの活動をタブレット端末で記録し評価に活用していく。

(4) 伝え合う力を高めるループリックの共有

広島県教育委員会「広島版『学びの変革』アクション・プラン」（平成26年）では、10年先を見据えた施策展開の中で、教職員・児童生徒による目標の共有化を挙げている⁽¹⁰⁾。

植山俊宏・山元悦子（2017）は「児童にとって『こんなことができるといいのか』『こんなことをがんばりたいな』ということが見えるような評価」⁴⁾の必要性を述べている。

そこで、ループリックによる自己評価や相互評価を取り入れ、伝え合う力の評価を行っていく。指導者が設定したループリックを表9に示す。

表9 指導者が設定したループリック

段階	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学びに向かう態度
3	○ 相手を見て話したり聞いて話すとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などの見せ方に注意して話している。	○ 開き手を意識して、テーマを決め、集めた本を比較したり分類したりして一つの本を選ぶことができる。 ○ 開き手を意識して、理由や事例などを挙げたり、構成を考えたりして本のおもしろさが伝わるようにシナリオを書くことができる。 ○ 一番伝えたいことや聞き手を意識して、抑揚や強弱、間の取り方、見せ方などを工夫してブックトークができる。 ○ 話し手の伝えたいことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいお薦めの本のおもしろさや自分が開いた本のおもしろさを見つけ、自分と友達の考えを比べながら聞き、自分の考えをもつことができる。	○ 話し手は、本を読んでお薦めしたいところを、話し方を工夫して聞き手に伝えようとしている。 ○ 開き手は、お薦めしたい本のおもしろさが何から理由や話し方の工夫を感じながら聞こうとしている。
2	○ 言葉の抑揚や強弱、間の取り方などで注意して話している。	○ テーマを決め、本を選ぶことができる。 ○ 理由や事例などを挙げたり、構成を考えたりして、本のおもしろさが伝わるようにシナリオを書くことができる。 ○ 抑揚や強弱、間の取り方などを工夫してブックトークができる。 ○ 話し手の伝えたいことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいお薦めの本のおもしろさを聞き、自分の読みたい本を見つけることができる。	○ 話し手は、本を読んでお薦めしたいところを、伝えようとしている。 ○ 開き手は、話し手のお薦めする本が何かを聞こうとしている。
1	○ 言葉の抑揚や強弱、間の取り方などで注意して話すこと自体が難しい。	○ テーマを決め、一つの本を選ぶことが難しい。 ○ 本のおもしろさが伝わるように理由や事例などを挙げたり、構成を考えたりして、シナリオが完成していない。 ○ ブックトークに抑揚や強弱、間の取り方などの工夫が見られない。 ○ 話し手の伝えたいことを記録するが質問が多いし、話し手が伝えたいお薦めの本のおもしろさを見つけることが難しい。	○ 話し手は、本を読んでお薦めしたいところを、伝えることが難しい。 ○ 開き手は、話し手のお薦めする本が何かを聞くことが難しい。

指導者が設定したループリックを基に作成した児童用のループリックを毎時間児童に提示する。授業の導入で児童にその時間における評価基準を確認し、授業の振り返りにおいて、ループリックを基に自己評価させる。ループリックは、授業における目指す児童の姿を3段階（1・2・3）に分けたものを使用する。児童に提示したループリックを図2に示す。

【相手意識を他学級とした時の伝え合う力の評価基準】

- 3 … 【（他学級への相手意識を児童の言葉で書き込む）】話し手の伝えたい本のおもしろさをメモを取ったり質問したりしながら聞き、改善点を伝え合うことで、ブックトークの練習をしている。
- 2 … 話し手の伝えたい本のおもしろさをメモを取ったり質問したりしながら聞き、改善点を伝え合うことで、ブックトークの練習をしている。
- 1 … 話し手の伝えたい本のおもしろさをメモを取ったり質問したり、改善点を伝え合うことが難しい。

【相手意識を同学級とした時の伝え合う力の評価基準】

- | | |
|-----|---|
| 話し手 | 3 … 自分の考え方や思いを理由や話し方を工夫して伝えようとした。 |
| 聞き手 | 3 … 友だちの伝えたいことが何かを理由や話し方の工夫を感じながら聞こうとしている。
2 … 友だちの伝えたいことが何かを聞こうとしている。 |

図2 第8時で児童に提示したループリック

児童用ループリックには、二つの相手意識の評価が毎時間できるようにして、相手意識をもつことの重要性を示す。そのことにより、児童は常に二つの相手意識をもちらながら学習を行うことができると言える。また、単元の前半は、児童用ループリックを用いて評価基準を児童と共有し、ループリックの有効性を実感させる。中間で相手意識を他学級とした時の2・3の基準の違いを確認する。後半では、3の指標の一部である相手意識とは何かを自分たちの姿に置き換えて考えさせ、児童の言葉でループリックに記入させる。段階を踏んで児童と共にループリックを改善することで、指導者と児童が評価の共有化や深化を図っていく。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

「A話すこと・聞くこと」の単元において、話し手と聞き手が相手意識をもったブックトークを行えば、本研究で設定した伝え合う力を高めることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表10に示す。

表10 検証の視点と方法

伝え合う力	検証の視点					方法	
	1	理由や事例などを挙げる力が高まったか。	2	話の中心が明確になるよう話の構成を考える力が高まったか。	3	話し方を工夫する力が高まったか。	
	4	必要なことを記録したり質問したりして聞く力が高まったか。					事前アンケート
	5	話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力が高まったか。					事後アンケート
		ループリックの共有は、伝え合う力を高めるために有効であったか。					ワークシート
		話し手と聞き手が相手意識をもったブックトークは、伝え合う力を育てるために有効であったか。					ループリック
							付箋動画

IV 研究授業について

1 研究授業の概要

- 期間 令和元年6月4日～令和元年6月24日
- 対象 所属校第4学年（1学級34人）
- 単元名 お薦めの本のおもしろさをブックトークで伝えよう
- 目標 相手意識をもってブックトークをすることで、伝え合う力を高めることができる。

2 指導計画（全12時間）

次	時	学習内容	知	思	学	評価		関連する伝え合う力
						○評価規準（評価方法）		
一	1	自分のお薦めの本のおもしろいところを発表し合う。				○ 自分のお薦めの本のおもしろさを友だちに伝えようとしている。（発言、リトート）		
	2	「学習のめあてを知りブックトークのやり方を理解する。」	○			○ 「学習のめあてを知り、ブックトークの手本を見つけておもしろいから本を選んで、班でブックトークを完成させ、お薦めの本のおもしろさを伝えていきたいと思うをもっている。（ワークシート）		
	3	テーマに沿って、お薦めしたい本を選ぶ。	○			○ テーマに沿って、お薦めしたい本を探し選んでいる。（ピックリスト）	①	
	4	紹介の仕方を話し合う。	○			○ 伝えたいおもしろさによっておもしろい紹介の仕方を話し合っている。（発言、ワークシート）		
	5	構成を考えてシナリオを書く。	○			○ 伝えたいことの中心や構成を考えて自分のシナリオを書くことができている。（ワークシート、付箋）	②③	
二	6	構成を考えて、同じテーマ毎にブックトークを完成する。	○	○		○ グループ毎に集まり、ブックトークのシナリオを完成させている。（ワークシート、付箋）	④⑤⑥⑦	
	7	練習し、助言し合う。	○	○		○ 伝えたいことに沿って練習し、お互いに助言し合うことができている。（ワークシート、付箋）	④⑤⑥	
	8	ブックトークを行う。	○	○		○ 同学級に向けて、お薦めの本のおもしろさが伝わるようブックトークをしている。（ワークシート、付箋、タブレット端末）	④⑤⑥	
	9	助言し合う。	○			○ グループを選び、助言し合い、練習することができる。（付箋、タブレット端末）	④⑤⑥	
	10	ブックトークを行う。	○			○ 他学級に向けてお薦めの本のおもしろさが伝わるようにブックトークをしている。（ブックトーク）	④	
	11	学習を振り返る。	○	○		○ お互いの発表を振り返り、感想、意見、考えを伝え合い、読み聞かせ活動に生かすことができている。（振り返りシート）	⑦	
三	12							

V 研究授業の分析と考察

1 本研究における伝え合う力は高まったか

検証は、検証の視点1～5について2つに分けて行った。(1)では、シナリオ作成時の助言し合う活動で身に付けた伝え合う力について、シナリオと助言記入後の付箋、ループリックによる児童の自己評価、感想、指導者による評価を基に分析した。次に(2)では、練習時の助言し合う活動で身に付けた伝え合う力について、ブックトークの練習と本番を撮影した動画と助言記入後の付箋、ループリックによる児童の自己評価、感想、指導者による評価を基に分析した。また(3)では、ループリックの共有が伝え合う力を高めることに有効であったかについて分析した。

(1) 理由や事例などを挙げる力・話の中心が明確になるよう話の構成を考える力について

第5時でシナリオを書かせた後、第6・7時でシナリオを持ち寄り、見せ方（技）、おもしろさの理由や構成、出だしの工夫、つなぎ言葉、文末表現に関わる点について、お互いに助言し合わせた。図3に児童が付箋に記述した助言例を示す。

（見つけた良さ）

- ・モーツアルトの才能のあるところが好きなんだね。
- ・「心が悲しくなった時のキツネの言った言葉は天才だ」と思った感想に興味をもちました。
- ・おたまじやくしと魚の仲がいいところが表現されていていいね。
- ・作者紹介がレオレオニの特徴や書いた本がよく分かるのでいいです。

（改善点）

- ・出だしの文で、野球が好きなことを書いたらいいと思う。
- ・もう少し海のことを詳しく書いたらいいね。
- ・○○くんが言いたいのは、いろいろな鉄棒のことだね。だったら、そこをくわしく書いたらいいよ。
- ・もう少しおもしろかったところを具体的に伝えてほしいな。

図3 児童が付箋に記述した助言

児童の多くは、友だちからもらった助言を参考にシナリオを書き上げることができた。伝えたいおもしろさを分かつてもらったり、書き加えたらいいところを具体的に助言してもらったりしたからだと考える。また、助言の中に話し手を意識した記述や、質問形式で内容を掘り下げている記述も見られた。

図4は自己評価において3をつけた児童の授業後の感想である。児童は、第5時の感想の中で、聞き手を意識した工夫について、「シナリオを作る時に聞き手に分かりやすいように、その場面のどこがよかったかをくわしく記述している」と書き、第6・7時の感想の中で「話し手の伝えたい思いを受けて、発表している友だちのおもしろさの理由や見せ方などの工夫、話し手の伝えたい思いがシナリオから読み取れた」と書いている。他学級への相手意識をもったことで、お薦めの本のおもしろさを他学級の友だちに分かつてもらいたいという気持ちをもち、おもしろかった理由を詳しく書くことへ繋がったことが分かる。また、同学級への相手意識をもったことが、友だちが何でおもしろさを伝えたいのか理由を考えたり、より伝わるための効果的な構成を考えたりして助言する活動へ繋がったことが分かる。これらのことから、相手意識をもって活動したことで、理由を挙げる力や話の構成を工夫する力が向上していることが分かる。

学級全体の児童（34名）の自己評価を図5に示す。また、第6・7時終了後の感想を図6に示す。

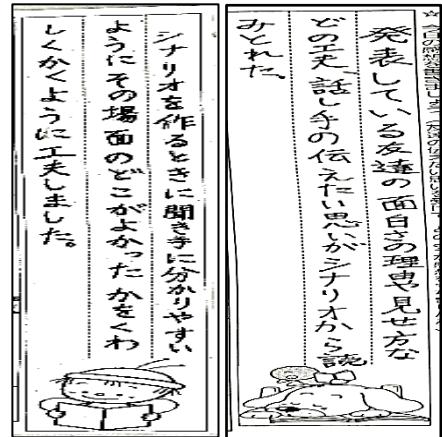


図4 5時（左）6・7時（右）における児童の授業後の感想

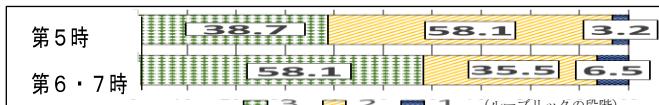


図5 シナリオ作成時における自己評価 (%)

- ・グループの人がアドバイスをしてくれたので、技を入れたシナリオができてうれしい。
- ・聞き手に分かりやすく読みきかせをするための方法を、友だちからアドバイスしてもらいシナリオを完成させた。
- ・アドバイスのおかげで自分の伝えたいことが伝わる自信がもてた。
- ・発表している友だちのおもしろさの理由や見せ方などの工夫、話し手の伝えたい思いがシナリオから読み取れた。
- ・友だちの伝えたい思いを受け、アドバイスやいいところを伝えた。

図6 第6・7時終了後の児童の感想

児童の自己評価によると、ループリックの3に当たる「他学級への相手意識をもった」児童が増えている。感想からも技の入れ方やおもしろさがより伝わる方法など、聞き手が話し手の思いを受容しながら具体的な助言をし合ったことが分かる。ここでも、相手意識をもつことで、具体的な助言に繋がり、理由を挙げたり構成を考えたりすることでシナリオの完成に至ったと言える。図7は、助言し合う活動の前後において、児童の作成したシナリオを理由・構成の観点で指導者が評価したものである。

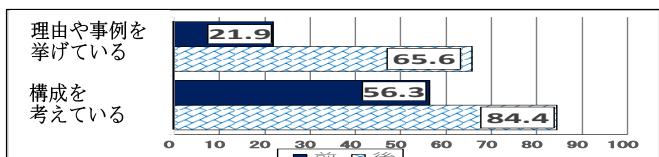


図7 助言前後のシナリオの評価（指導者による）

理由や事例を挙げたり、構成を考えたりしている児童の割合が増加している。助言を受けたことで、シナリオに書く内容のイメージが膨らみ、シナリオを完成することができたと考えられる。

活動の前後で変容が大きかった児童Aのシナリオを図8、図9に示す。

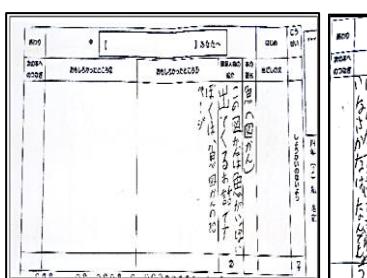


図8 第5時のA児のシナリオ



図9 第6・7時のA児のシナリオ

A児は、アドバイスタイム前、シナリオの書き方やおもしろさをどこにするか悩み、シナリオをほぼ

書くことができなかった。しかし、アドバイスタイム後には、空欄部分をほぼ埋め、おもしろかったところの一つ目の欄に書き足すことができていた。第6・7時間目のA児の感想には、「みんなで協力して書くことができた」とある。A児に理由を尋ねると、「おもしろさの伝え方を悩んでいたが、友だちが理由を付けたり、クイズを出したら楽しんで聞いてもらえるのではないかと助言をしてくれた。出だしも、友だちが例を出してくれたので、それを基にして考えることができた。3組のB君に見てもらいたいと思ったからシナリオが完成した。」と答えた。ループリックにおけるA児の自己評価は、1→3に変化した。A児への助言からも、A児のグループの中に同学級のA児に対する相手意識だけでなく、他学級への相手意識をもっている児童がいることも分かる。

これらのことから、シナリオ作成時に相手意識がもてたことで、理由や事例を詳しく挙げたり、効果的な構成を考えたりする必然性が生まれ、理由や事例を挙げる力・話の中心が明確になるよう話の構成を考える力が高まり、伝え合う力が育ったと言える。

(2) 話し方を工夫する力・必要なことを記録したり

質問したりして聞く力・話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力について

第8時から第11時では、シナリオを用いてブックトークの練習と本番を行った。自分で考えた表現の工夫をシナリオに書き込んだ後に、表現の工夫を観点として、良さや改善点を付箋にメモをして助言し合った。第8時から第11時の学級全体の児童の助言例と自己評価の変化を図10と図11に示す。

（見つけた良さ）

- ・ゆっくり話していくて聞こえやすかったよ。
- ・「みなさん どう思いますか」という問い合わせがとても上手だった。
- ・読みきかせやクイズの時に間をとっていたので、分かりやすかったよ。
- ・速さや声の強弱を工夫していくて抑揚に気をつけていたことが分かった。(改善点)
- ・太陽系の話は、絵を見ながら読んだ方がいい。
- ・おもしろさが伝わるように、抑揚に気をつけて練習するといいよ。
- ・もう少し本を上げて聞き手に目線が合うように調整するといいと思う。

図10 第8時から第11時の付箋に記述した助言

図10を見ると、声の大きさだけでなく抑揚や間などについて助言していることが分かる。これは、第8時では見られなかった助言だが、回数を重ねることで第11時で具体的な助言になったと考えられる。また、助言し合う活動の中で相手意識とは何かを自分の言葉で伝え合い、聞き手のことを考えて助言し合った。それにより、図11に示すように、児童が相

手意識をもったと感じ、自己評価で3をつける児童が増加した要因となった。感想を図12に示す。

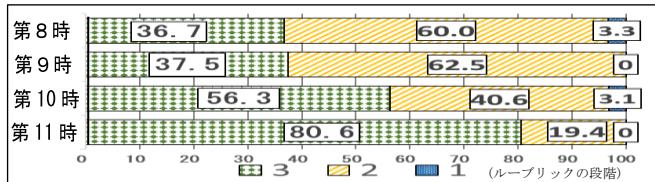


図11 ブックトークの練習と本番における自己評価(%)

- みんなで動画を見てアドバイスし合ったり、聞き手を意識したりしてブックトークができる。
- もう少し声を上げた方がいいよと言ったけれど、自分の声も小さいことが動画に撮って分かった。
- 上手になってほしい気持ちとブックトークをしてその本を読んでもらいたい気持ちで助言した。
- 話し手の伝えたいおもしろさを感じて助言した。自分も助言を受けたのでそれを直していく。
- 話し手の本のおもしろさを分かってもらいたいし、読んでほしいという思いを受けて助言した。
- ちがうテーマの人も読んでみたくなるような工夫がいっぱいあってすごかったです。読みたくなりました。

図12 第8時から第11時の児童の感想

第8時から第11時では、助言記入後の付箋とブックトークを撮影したタブレット端末を資料として、自己評価と相互評価（児童同士、指導者と児童）ができるようにした。この段階では、グッドアドバイスカードから離れ、自分の言葉で助言し合う姿も見られた。これにより、必要なことを質問する力が高まったと言える。また、図12からも、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力も高まった。さらに、指導者による表現についての評価は、学級全体で図13のような変容があった。

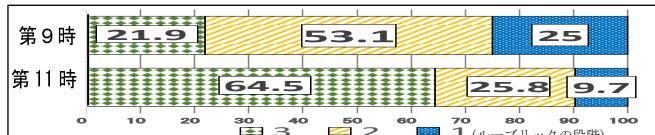


図13 助言前後の表現の評価（指導者による）(%)

なお、ここでの表現とは、強弱・抑揚・間の取り方である。指導者による評価においても、児童の表現する力が向上していた。また、第8時以降のA児の自己評価は、全て3であった。理由として、「相手意識が分かった。B君は何の魚が好きかなとか、ぼくの好きな魚と同じかなとか、B君を想像しながら練習をすることができたから。」と述べている。A児にとって他学級に対する相手意識が具現化したことが分かる。また、A児の思いを受容しながら友だちが具体的に助言したことによって、A児の話す力が伸びたと考えられる。

その他にも、友情をテーマとした児童は、「私は

友だちとけんかをしたことがある。友だちもそんな経験があると思う。私はこの本を読んでとても勇気付けられたから、同じ経験をした人がこの本を読んで元気になってもらいたい。」や、星をテーマとした児童は、「ぼくは太陽系がとても好きだから友だちにも興味をもって好きになってもらいたい。そして、太陽系について友だちといろいろな話をしたい。」など他学級への相手意識をもち、生活経験から感じた自分の思いや、自分と同じ価値観を共有したいと思っている児童がいることが分かった。

このように、単元を通して常にもたらせる他学級への相手意識が高まったことにより、伝えたい思いをより一層抱いたことが言える。また、同学級で助言し合う活動においても、話し手の思いを受容しながら助言する活動が活発となり、話し方の工夫を具体的に助言し合ったと考えられる。それは、助言し合う活動を繰り返したことが、互いの立場や考えを尊重したり、共感したりする意識の高まりに繋がったからだと言える。その意識の高まりが、より具体的な表現（抑揚・強弱・間など）の助言となり、一人一人の表現の向上に繋がったと考える。

のことから、話す力である話し方を工夫する力、聞く力である必要なことを記録したり質問したりして聞く力、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えて聞く力が高まり、伝え合う力が高まっていることが分かる。

以上(1)(2)のことから、話す力と聞く力が伸び、話し手と聞き手が相手意識をもち、相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の考え方や気持ちを言葉で伝える力が向上しており、伝え合う力が高まっていることが分かる。

(3) ループリックの共有は、伝え合う力を高めるのに効果的であったか

「目指す姿がはっきり提示してあることは、やるべきことが分かり学習しやすい」と児童から発言があった。確かに、ループリックを児童に提示することは、指導者と児童の共通の指標となった。しかし、学習が進むにつれ、児童の自己評価と指導者による評価にずれが生じてきた。第5時で児童に示したループリックを図14に、第5時と第8時における指導者と児童の評価の割合を図15に示す。

- 3…聞き手を意識して、理由や事例などをあげたり、構成を考えたりして、本のおもしろさが伝わるようにシナリオを書いている。
- 2…理由や事例などをあげたり、構成を考えたりして、本のおもしろさが伝わるようにシナリオを書いている。
- 1…理由や事例などをあげたり、構成を考えたりして、本のおもしろさが伝わるようにシナリオが完成していない。

図14 第5時で児童に示したループリック

ループリックの段階			
第5時	3	2	1
児童	38.7	58.1	3.2
指導者	3.1	37.5	59.4

ループリックの段階			
第8時	3	2	1
児童	36.7	60.0	3.3
指導者	36.7	60.0	3.3

図15 指導者と児童の評価の割合 (%)

第5時における評価のずれの原因として、児童にとって理由・事例・構成ができたかどうかの判断は難しかったということが考えられたので、理由・事例・構成について指導し直した。また、指導者が、完成したシナリオだけで相手意識をもっていたかどうかを見取るのが難しいという課題も生じた。そこで、シナリオ、自己評価、感想などの記述を基に、児童と対話をしながら、相手意識とはどんな姿かを聞くことで共有を図ることとした。また、第6時からは、他学級への相手意識について児童の言葉で考えたものをループリックに書き込ませて、全体に発表させることで共有を図った。指導者による評価は、助言記入後の付箋、ループリック、感想、ブックトークを撮影した動画など多くの資料を用いて行った。

さらに、指導者による評価と自己評価の差が大きい児童に対しては個別指導を行い、学習の成果と課題を児童に自覚させた。自己評価で1をつけた児童には、1をつけた理由を聞き取った上で学習の成果を伝えたり、友だちの見つけた良さが書かれた付箋を提示したりして肯定的評価を行ってその後の学習の意欲付けを行った。このことにより、児童自身が学習の成果と課題を自覚することができた。また、指導者と児童がループリックを共有することで、伝え合う力の高まりを児童自身に自覚させることが有効であることが分かった。

これらのことから、単元を通したループリックの共有は、伝え合う力を高めるのに効果的であったと言える。

2 話し手と聞き手に相手意識をもたせたブックトークは伝え合う力を高めるために有効であったか

本研究では、相手の立場や気持ちを大切にし合う双方向的な「伝え合い」を大切にしながら、相手意識をもたせた活動が伝え合う力を高めると捉えた。そこで、アドバイスタイムを単元において計4回実施した。ここでは、ループリックへの記述と事前と事後アンケート、児童の感想を基に、ブックトークの有効性を明らかにする。

(1) 相手意識の変容（ループリックへの記述から）

児童の相手意識の変容を図16に示す。

- | | |
|------------------|--------------------|
| (第9時) | ・聞き手を意識して分かりやすい態度で |
| ・聞き手のことを考えた上で | ・聞き手が聞きやすいように |
| ・自分の言葉が相手に伝わるように | ・聞き手が読みたいと思うような |

- | | |
|-------------------------------|------------------|
| (第12時) | ・一番伝えたいことが伝わるように |
| ・相手の気持ちになって喜んでもらえるように、楽しくなるよう | な |
| ・相手が読みたくなるように、間、抑揚、表現、見せ方を使って | |
| ・相手がおもしろいと思ひきこまるよう | な |
| ・相手が本を読みたいと思う見せ方をして | |
| ・ブックトークで一番伝えたいことが分かつてもらえるように | |

図16 相手意識の記述の変化

図16から、第9時のループリックの記述には、分かりやすい、聞きやすい、考えるなどの抽象的な言葉が多いのに対し、第12時では、相手の気持ちを汲んだ記述や、自分が取り組みたい具体的な方法の記述、聞き手の立場や気持ちをより大切にして伝えようとしている児童の姿を見取ることができる。学習を積み重ねていく中で相手意識が明確になっていったと考えられる。これは、「自分のお薦めの本のおもしろさを知ってもらいたい」という、児童自身が伝えたい思いを抱くことができるブックトークならではの学習の利点が根底にあり、その上で相手意識を具現化していったことが伝え合う力を高めたと言える。

(2) 相手意識の変容（アンケート調査から）

ブックトーク前後で児童の相手意識に対する肯定的評価について図17のような変容が見られた。

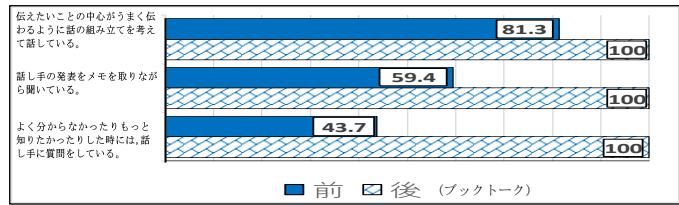


図17 相手意識の変化 (%)

話し手は、「お薦め本のおもしろさを知ってもらいたい」という伝えたい思いが話し方の工夫に繋がり、聞き手は、助言し合う活動を繰り返すことで、「話し手が伝えたいおもしろさを分かつてあげたい」という思いがメモや質問という行動に繋がったと考える。児童が挙げた助言し合う活動の感想を図18に示す。

- ・アドバイスがあるおかげで、ブックトークがよくなるので、アドバイスは絶対だと思います。
- ・アドバイスがないといいブックトークはできなかつたと思います。
- ・アドバイスしてもらうと、自分では気付けなかつたところが気付けて上達しました。
- ・抑揚や強弱をはっきりと使っているグループとアドバイスしあえて、ほくの伝え方も上手になりました。
- ・アドバイスをしてもらう前と後では全然ちがうと言われました。自分にも新しい発想ができました。
- ・アドバイスのおかげで自分が足りていないところを知りました。そしてたくさんのアドバイスで自分に自信がつきました。

図18 助言し合う活動の感想

図18から、児童が助言し合った相手を尊重する態度をもっていることや、自分の話す力が向上したことと実感していることが分かる。また、自分の考えや気持ちを言葉で伝える良さや楽しさに気付いていることも分かる。このことから、相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の立場や気持ちを言葉で伝え合う力が向上していると言える。児童の学習後の振り返りを図19に示す。

・友だちはこんなことが伝えたいのか、本を読んでもらいたいからこんな工夫をしているんだと気持ちを考えて聞くと、友だちのブックトークがとても分かりやすくなりました。
 ・人前で発表するのが少し苦手な私も、みんなのいいところのまねをしていくと、楽しくブックトークができました。
 ・自分がえたおもしろさを人に伝えるおもしろさが分かりました。
 ・友だちのブックトークはとてもおもしろくて、友だちの本を読んでみたくなりました。
 ・初めと違う種類の本を読んだり、何度も読みたい本を見つけたり友だちに紹介したりと思う気持ちが、勉強前より大きくなりました。
 ・絵本は嫌いだったけど、ブックトークをして絵本が好きになりました。前は全然読書をしていなかったけど、ブックトークをして本がおもしろくなりました。
 ・自分が相手に伝えたいと思う本を選び、自分が考えるおもしろさや悲しさ、嬉しさなどを見せ方や表現を工夫することで相手に伝えて、自分が紹介した本を相手が読みたいと思ってくれると、お互いに本を読むことが深まるからブックトークは楽しかったです。
 ・本をちゃんと読む力がつきました。ブックトークで、聞き手が楽しんでくれていたのが嬉しかったです。

図19 学習後の振り返り

図19から、聞き手を意識して話したり、話し手の思いを受けて助言したりする中で、伝え合う楽しさを感じたり、本に興味をもったりしてブックトークの良さを感じていることが分かる。

これらのことから、話し手と聞き手に相手意識をもたせたブックトークは伝え合う力を高めるために有効であったと言える。

(3) 読みの解釈について（児童の感想から）

本研究におけるブックトークは、自分の薦めたい本を一冊選んで、同じテーマ同士でお互いの本を読んだ上で助言し合った。その中で「ハッピーエンド」をテーマに選んだ児童が、同じ本を薦めることになった。指導者としては違う本を選んでほしかったが、児童から「伝えたいおもしろさが違うから同じで良いか」という相談を受け、同じ本を紹介することになった。児童の感想には、「選んだ本は同じなのに、おもしろいと思うところは違うんだと思った」「ぼくが選んだおもしろさとは違うけど、本がもっとおもしろいと思えた」「おもしろさを伝えたい技の選び方は、ぼくが思いつかないものだった」とあった。また、助言内容にも「おもしろさがそこなら、見せ方は○○の方がより伝わると思う」など、本の内容をよく理解した上で助言していることが分かるものもあった。これは、同じ本を読んだことで、より解釈が深まったため、感想や助言への深化が見られたと考えられる。このことにより、同じ本を使用

して言語活動を行えば、助言内容や感想、話合いがより深いものになると考えることができる。

VII 研究のまとめ

1 研究の成果

相手意識を明確にもったブックトークは、伝え合う力を高めることが分かった。また、指導の工夫の中でも助言し合う活動は、伝え合う力を高めるのに最も有効だと考える。それは、相手の思いを受容しながら助言し合うことで、話し手と聞き手に互いの考えを共感する力が向上し、互いの立場や考えを尊重することに繋がるからであると考える。

2 研究の課題

児童の伝えたい思いを喚起する点でブックトークは効果的であり、学びに向かう意欲や読書への意欲を高める活動になる。しかし、高学年に向けて本の解釈にあたる心情の変化や展開のおもしろさなどに着目し、読みを深めるためには、同じ本を使用して児童同士が吟味する言語活動を単元に組み込む必要がある。年間を通して国語科の単元と様々な読書指導とを関連させる必要がある。

【注】

- (1) 文部科学省(平成28年)：『言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ』p.3を参照されたい。
- (2) 中央教育審議会(平成28年)：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』p.130に詳しい。
- (3) 小森茂(1999)：『「伝え合う力」の育成と音声言語の重視』明治図書p.2を参照されたい。
- (4) 松岡淳子・全国SLAブックトーク委員会(1990)：『ブックトーク—理論と実践—』明徳印刷出版社pp.13-47に詳しい。
- (5) 青木淳子(2014)：『キラキラ応援ブックトーク 子どもに本をすすめる33のシナリオ』岩崎書店pp.8-20に詳しい。
- (6) 東京都小学校図書館研究会ブックトーク研究委員会(2007)：『小学生のためのブックトーク 12ヶ月』厚徳社pp.11-15に詳しい。
- (7) 青木淳子(2014)：前掲書pp.14-15に詳しい。
- (8) 難波博孝(2006)：『楽しく論理力が育つ国語科授業づくり』明治図書pp.15-20を参照されたい。
- (9) 木下美和子(2005)：『「伝え合う力」を育てる国語科授業の創造』明治図書p.27を参照されたい。
- (10) 広島県教育委員会(平成26年)：『広島版「学びの変革」アクション・プラン』p.9を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成30年)：『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』東洋館出版社p.12
- 2) 本堂寛(2000)：『小学校・新教育課程のキーワード第1巻[国語科]「伝え合う力」を育てる国語学習』東京書籍p.7
- 3) 本堂寛(2000)：前掲書p.9
- 4) 植山俊宏・山元悦子(2017)：『話す・聞く 伝え合うコミュニケーション力』東洋館出版社p.46